



DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止





——かつて、どう足掻いても勝てない相手がいた。

二度にわたり挑戦し、自身の技術のすべてを尽くし、執念も出し尽くした。
それでも勝てなかった。

『キミが魅力的なように、私もまた魅力的、だからさ』

その女の涼しい笑顔が、今も頭から離れない。

「……………」

輿水幸子は言葉にならぬため息をつき、険しい表情。
気に入らぬことを忘れるためにノートの清書を始めたというのに、結局それが思考の片隅にこびりついてい
る。苛立ちを隠さずペンを何度かもてあそび、忌々し気な表情を作りまたため息。

「……………はあ…」

「おい、自慢のカワイイ顔が台無しだぞ。どうしたんだ？」

「ああ…美玲さん。いえ、これは…大したことじゃないんですよ」

全裸で毛布にくるまった早坂美玲が氣遣うように見つめているのに氣づくとその不機嫌そうな表情のまま答えるが、どう見ても大したことじゃないという表情ではない。

「ホントか？ホントにそうか？ウチに何か隠してないか？」

「う……別に隠してはいないです。ただ、ある人に対してトゲのように刺さって抜けないものがあつて、いつかそのお礼をしなくてはと思つていたんです。今なら、それが果たせるかもしれない」

「ふうん、つまりサチコはその相手に昔負けたつてことか？」

「なっ！？美鈴さんあなたそんな聞かれたくないことをですねぇ！」

「でもそうなんだろう？」

うう……と言葉に詰まつて顔を反らす。

だが敗北など通過点にしか過ぎない。それをこの少女は良く知っている。そしてそれは、もうひとりの少女も同じだった。

「でもさ、今なら勝てそうなんだろう？そう感じてゐるから、いつ挑むか悩んでるんじゃないか？」

「…美鈴さんってそういうところ、イチイチ鋭いですね…」

「ふふん、ウチは觀察力あるからな！」

えっへんと毛布にくるまったまま少女が胸を張る。

その様子がどうにも滑稽で苦笑しながら幸子も彼女の思考を肯定する。

「そうですね。今のボクなら彼女に勝てるはず。その思いが日に日に強まっているんです」

「大丈夫だ、サチコはウチが知ってる中で一番根性がある！絶対に負けないっていう強い勝負根性がな！」

「そうでしょうそうでしょう！なにせボクはカワイイですからね！！」

テクニシャンではないのか？とどこかで引つ掛かりながらも、幸子も大きく胸を張る。

——そうだ、そんなことで思い悩む方が自分らしくない。今こそ彼女に再戦を挑み名誉を挽回するときだ。

そう決意した瞬間

「うおーい、幸子いるかー？」

「はい？」

「おー！いたいた！ちょっと届け物頼まれてさー。サクッと受け取ってくんね？」

突然の訪問者、桐生つかさはその手に封筒を携えていた。

その日、東郷あいはいつもと同じ朝を迎え、いつもと同じく自らの手で淹れたコーヒーを黒埼ちとせと白雪千夜の主従に振舞った。そして

「それで昨日の探索はどうだったのかな？」

「私は晴ちゃんと出会って：いや、結構凄かったのよ。体力えぐかったわ」

「まあ彼女のような年ごろであれだけサッカーをしてる子も少ないだろう。その体力が加わるとかなりの脅威になるかもしれないね」

「こそ。何とかはなつたけど：正直ちょっと怖かったわ」

「お嬢様、そんなこと昨夜は言っていないでしたか：？」

だって千夜ちゃんにいったら絶対心配するじゃないと笑うと、千夜は困ったような顔。それでもしばらくして感情を飲み込むと、

「それは一旦置くとして。私は藤原肇さんと遭遇しましたね」

「どうだったかな？彼女は」

「幸運にも中立でしたので、色々と情報交換をしました」

「ほう、幸運？」

「ええ…かなりの実力者だなと感じました。私もふたなりサキュバスとして多少経験を積みましたからね…」

なるほど、と東郷あいはずく。

確かに彼女たちがふたなりサキュバスになってからもう一ヶ月以上経過している。自分のような純正の、しかもロードクラスのサキュバスとは異なるが、一流の偶像（アイドル）としての力を有する彼女たちはこの短期間で急速にふたなりサキュバスとしての力を付けていった。

（もつとも…あまりに力を持ちすぎるということは…元に戻れなくなるといってもあるのだけだね）

そこをどう考えるのか。

東郷あいはずっと自問し続けていた。白雪千夜には「この茶番を終わらせるべきだ」と言われ、それに同意して活動している。

だが果たしてこのふたなりサキュバス化したアイドルたちが自らの手でその元凶を倒せるのか。

（私が信じないと何も始まらない、か）

布石は既に打った。ならば、と考えていると、千夜がこちらに視線を向けてくる。

「あいさんはどうだったのですか」

「ああそうだね、私はちよつと考えたことがあってね。とある少女に助力を頼もうと思ったのさ。それでつかさ君に連絡を頼んだんだ」

「私たち以外に助力を…ですか？」

「その通り。うまくいけばもうすぐ…」

そう彼女が言いかけたそのとき、

「あいさん！聞きましたよ！このボクの力が必要だとは、中々お目が高いですねえ！」

普段以上にテンションの高い勢いで、輿水幸子が部屋の中に飛び込んできた。

思わず千夜とちとせが振り返ると、まさかふたりがいると思わなかったのかあわてて直立して

「おはようございます。ちとせさん、千夜さん。そして東郷あいさん」

「はいおはよ、幸子ちゃん」

「おはようございます」

「ようこそ幸子くん。歓迎するよ」

そういつて東郷あいはいカウンターを抜けるとカツカツと幸子の前まで歩を進める。そんな彼女を両腕を腰に当てて「ふふん」と息を鳴らした幸子は真っ直ぐに見据えていた。

「手紙、読みましたよ。この騒乱を收拾するためにボクの力が借りたいと。しかしその前に何をすべきか、ちゃんとわかつているようですね」

「ああもちろんさ。キミのように誇り高い少女であれば、絶対に避けて通れないことだ」

口元に手を当てて微笑する。

「まあボクもこの無秩序な状況は好ましいとは思っていません。協力はしましょう。ですが…」

「そうだね。挑むといい、この私に」

「挑む？違いますね、これは決闘なんです、ボクとあいさん…あなたのね」

言葉のさや当てをするだけで興奮してきたらしい。ふたりのペニスを着衣の下からでも勃起しているのが分かる。

互いにそれを気にせずに涼しげな表情で微笑みを交わし、

「なるほど。では艶競（はでくらべ）と行こうじゃないか、私とキミ、どちらが美しいのか、キミの言葉を借りるのならカワイイのか。そして…」

「どちらがイき残れるのか。快樂の中でも誇り高くあり続けられるのか。良いですね、実に分かりやすい」
「来るといい。ではちとせ君、千夜君、ふたりも気を付けて一日を過ごしてくれ。私は彼女と決着をつけてくるから」

「おふたりとも良い一日を。後でこのボクの武勇伝を聞かせてあげますよ！」

そう言いながら、幸子とあいは隣の部屋に消えていった。

「ここですか、ボクたちの決戦のステージは」

「ああそうだ。いささかムードには欠けるが…構わないだろう？」

「もちろん良いですよ、ボクは寛容なので」

扉を抜けた先は料理番組などで使うキッチン施設のある撮影スタジオになっていた。明るい照明と清潔感のある水回り、そして本来は料理や食材を美しく並べるための広く長い食器棚などが内蔵されたテーブル。

この硬い板の上で雌雄を決しようというのだろう。

だがまずは小手調べだ。

「ほら見せてくださいよ、あなたのおチンチンを」

「もちろんさ」

互いに服を脱いで全裸になると、相手のペニスをよく観察する。

ふたなりサキユバスの中には巨大なペニスを誇るものもいるが、別にふたりはそういうタイプではない。東郷あいのペニスの方が興水幸子のペニスより一回りは大きいが、一般人のものより若干大きいかどうかという程度のペニスである。

「ふむ：幸子君は機能性の高そうなペニスだね。大きすぎず小さすぎず：密度もありそうだ」

「あいさんのおチンチンも中々のものですよ。こうでなくては、倒し甲斐がありませんね」

「フツ、倒されるのはどちらかな？」

「三度目はないですよ：」

相手のふたなりペニスへの期待感に胸の高鳴りを覚えて、思わず口元が緩んでしまう。それでも余裕を演じながら、互いのペニスを交錯させた。

「んん！：！：」

「ふっ！？」

一瞬声を上げたもののすぐに表情を戻して

「予想通り良いペニスだね…一体どれだけのアイドルをよがらせたんだい？」

「そういうあいさんはどうなんです？宝の持ち腐れだった、なんてことありませんよね？」

互いに手を使わず腰の動きだけで勃起したペニスの鏝迫り合いを行う。まだ先走り汁は出てこないが、それでもこの動きだけでも互いの力量が見えてくるというものだ。

（まさか…これほどとは）

東郷あいはい内心舌を巻いていた。興水幸子はこのわずかな時間の中でふたなりサキュバスとして完成されつつある。

どれだけ多くの…というのは本音だ。腰の使い方も女性のものではなく、男性的な動かし方を完全に自分の物にしていた。

油断をすればこのペニス同士の鏝迫り合いだけで持っていかれてしまうかもしれない。

「ほらほら…どうしました？ボクのカワイイおチンチンの魅力を感じちゃってるんですか？」

「ああ…正直驚いたよ。さすがは幸子君、といったところか」

「そうでしょう！だからもっと感じて良いんですよ？」

興水幸子の腰使いがさらに激しくなり、東郷あいはそれに合わせるように腰を振る。

（まずいな……）

このままでは押し切られる。そう思って幸子から主導権を握り返そうとするが…

「甘いですね、ボクにはお見通しですよ」

「ッ!?!」

リズムを変えようとしたその瞬間、強くペニスを押し付けられてしまい思わず小さな喘ぎを漏らす。

「あいさんこそ……ボクのおチンチンにしごいてもらう準備はよろしいですね？」

「くっ……!」

そう、そもそも幸子の狙いはこのタイミングだったのだ。腰の動きに合わせて東郷あいのペニスを強く押し付けることで、その動きを封じる。そして……

「ほら、ほら!ほら!」

「んぐっ!あうっ!」



幸子の腰使いが激しくなり、東郷あいはただ喘ぐことしかできなくなる。

（まさか、これほどとは…）

このままではすぐに射精させられてしまう。そう判断した東郷あいは強引に腰を引くことで幸子のペニスから脱出しようと試みる。

だが……

「逃がしませんよ!!」

「ツう!?!」

その隙を与えず興水幸子は再び東郷あいのペニスに自らのものを押し付ける。

先ほどよりも強い力で押し付けられ、東郷あいは思わず声を漏らす、それでもなんとか耐えて腰を引こうとする。しかし

（まずい!）

今度は素早い動きで追いつかれてしまい、腰が引けてしまう。そして…

「ほらほら！」

「ぐっ、あっ」

再び幸子のペニスに押し付けられてしまい、情けない声を上げてしまう。

（まさか、このまま追い詰められて…）

なんとか脱出しようとするが、そのたびに幸子の巧みな腰使いによって阻止されてしまう。
そしてついに……

「く、こんな…んッ、くう、くうううううう！！！！！！」

「あはっ！ボクの勝ちですね！」

「……………ッ」

奥水幸子の勝ち誇ったような笑いとともに東郷あいは絶頂を迎えてしまった。

勢いよく飛び出した精液が床を汚してしまっている。その量はかなりのもので、与えられた快楽の大きさを示していた。

（なるほど。私を倒す算段を付けてきた、というのは間違いないようだ）

一度射精をしたことで落ち着きを取り戻した東郷あいは冷静に状況を分析する。

幸子のテクニクが優れていることは分かったが、自分の見通し以上に強くなっていたということは東郷あいにしても嬉しいことではある。

そんな相手とセックスで戦える。こんなに楽しいことはないのだから。

「さて…先手を取らせてもらったので、このままいきますよ」

「ああ………」

幸子の動きにあわせてお互い床にひざまづき、向かい合くと、次の動作への準備をする。

「では、もう少しおチンチン同士の力比べを試してみましようか」

自分のペニスの位置を調整し、幸子のペニスの位置と合わせる。

そして…

「ん……」

「んっ」

互いにゆっくりと腰を動かしていく。動くたびに二人の体がわずかに揺れ動き、その振動がペニスにも伝わっていく。

ふたなりサキュバスである以上ペニスへの快楽は克服できない。それは双方に等しいものだ。

「ん……なかなか……」

「でしょう？ボクの腰使いは、あいさんのおチンチンをちゃんと感じさせることが出来るんです」

興水幸子のペニスが東郷あいのペニスに絡みつくように動き、その形をなぞり上げる。そして同時に自らのペニスで相手のものを愛撫し、快楽を与えていく。

「んっ！あっ！」

「ほらほら、どうしましたか？」

「くっ…ン…！」

完全に主導権を奪われてしまいそうになる。このままでは一方的にイカされてしまうだろう。

「さあ、そろそろいきますよ」

「いやなんの、これからさ」

「!?!」

幸子はさらに激しく腰を動かし始める。が、動きに合わせて東郷あいも負けじと腰を動かしていく。その反撃に、幸子が声をあげた。

「くう、こ、この…!」

「ふ、ン…どうかな?」

「あつ、ああつ!この、こんな…あア!?!」

「んっ…くっ…くっ…うううう…」

二人のペニスが絡み合い、互いに快感を与えていく。そしてほどなく

「んッ!!ンンンン!!!!!!」

「くうー…くうー…くうー…ッッッ!!」

同時に絶頂を迎えた二人はそのまま崩れ落ちる様にして床に倒れこむ。だがそれでもなお互いのペニスは勃起し続けている。

ふたなりサキュバス同士のセックス勝負は、そう簡単に終わるわけではないのだ。

「やるじゃないか……さすがは幸子君だ」

「当然です。ボクのカワイイおチンチンは最強無敵なんですから」

「ふふふ……ではその最強のおチンチンに屈辱を与えてあげようじゃないか」

「受けて立ちますよ！ボクだって負けませんからね！」

そして二人は再び互いのペニスを勃起させると、今度は相手の体を抱き寄せるようにして腰を動かし始める。

互いに相手の動きを封じようとしながらのセックスだ。先ほどよりも激しい動きで攻め立ててくるが、それでも東郷あいは怯まない。

「ッ！くうう！」

「く、っあ……！」

「ううううう、ボクは、まだ……！」

「そうか……な！？」

「んぐあ！？し、しかし……ああアアアア……！！！」

「くうううう、こ、これは……ウウウウウ！？」

同時に絶頂に達する二人だったが、それでもなお二人の動きは止まらない。むしろさらに激しさを増していく。